

株式会社ウェザーニューズ
三枝 茂さん(42歳)



南極観測船の「宗谷」「ふじ」「しらせ」など、

東京都立川市の出身だ

昭和基地とともに日本人には馴染みの名称だ。三枝茂さんは学生のとき、初代の「しらせ」に乗船し、平成7年11月から翌年3月まで第37次観測隊の一員として南極に渡った。現在は世界最大といわれる気象情報会社のウェザーニューズで「SHIRASEプロジェクト」の主任を務める三枝さんに南極での活動、現在の仕事、本学の思い出などを聞いた。

人生観変えた南極体験

が、幼い頃から母方の実家が、幼い頃から母方の実家である山梨県塩山市(現・甲州市)の山並みを見て育った三枝さんは、高山や極地特有の地形や環境に興味を持つようになった。昭和63年4月に本学文学部史学地理学科に入学した。当時は昭和天皇の崩御により社会全体が自

生(現)の自主性を重んじ、いろいろなことをやらせてくれた」と、大学生活を振り返る。また、長谷川教授の仲介で、同じ分野を学ぶ他大学の学生との交流も生まれ、他大学のゼミにも顔を出するなどネットワークが広がった。

昭和63年4月に本学文学部史学地理学科に入学した。当時は昭和天皇の崩御により社会全体が自

生(現)の自主性を重んじ、いろいろなことをやらせてくれた」と、大学生活を振り返る。また、長谷川教授の仲介で、同じ分野を学ぶ他大学の学生との交流も生まれ、他大学のゼミにも顔を出するなどネットワークが広がった。

帰国すると、南極への誘いが舞い込んだ。国立極地研究所が学生の観測隊への参加を認め、その第一号として三枝さんに白羽の矢が立ったのだ。憧れの地は岩がむき出し、まるで火星のようだった」と振り返る。夏期だから、気温はマイナスイ5度からプラス3度、白夜が続き、聞こえるの

爾ムードで、大学でも学園祭など催事の中止が相次いだ。おのずと大学への関心も薄れていた。そんななか、学生たちにげきを飛ばす元気のいい先生がいた。若き日の長谷川均教授(当時は講師)だ。3年次のゼミでは、調査のノウハウを得るために石垣島へ。「学

本学を卒業後は、明治大学大学院文学研究科地理学専攻修士課程、国立総合研究大学院大学博士課程へと進んだ。南極観測隊入隊の1年前だ。

学生隊員第1号

大学院博士課程在学中、北極圏のスピッツベルゲン島での調査を終え

要条件だ。三枝さんを知る関係者らの推薦により南極観測隊で初の学生隊員が誕生した。

まるで火星のよう

南極では、昭和基地周辺の氷河や海面の変動と気候変動の関係を調べた。昭和基地と離れた場所ですべての調査を終え

はペンギンの鳴き声と氷の割れる音ぐらいい。ほとんど無音の世界だ。昭和基地や「しらせ」に戻ると「町のように賑やかでほっとした」と振り返る。

任務を終え、帰国したとき「花の香りと緑の心地よさ、星が浮かぶ夜空のありがたさを感じた」という。南極で

の経験は、人生観を変えた。「自然は徹底的に守らなければならない」と思っていたが、「自然と人との共存共栄が自然を守る術」と考えを改めた。土砂災害が発生するたびに現場へ向かう日々が続いた。そして平成14年、

大学院を満期退学した三枝さんは、土砂災害を防ぐための調査・設計を行う土木コンサルタンツ会社に就職。台風や豪雨で土砂災害が発生するたびに現場へ向かう日々が続いた。そして平成14年、



南極での三枝さん。5カ月間の滞在は自然との共生を考えるきっかけとなった

入社した。平成20年、自らが乗船した「しらせ」の解体が発表されると、同社は当時の石橋博良会長を筆頭に誘致活動を実施せ「環境のシンボル」として買い取った。当然ながら三枝さんは、SHIRASEプロジェクトの責任者に抜てきされる。今は業務のかたわら、船橋港に係留する「SHIRASE」を一般公開し、偉業や足跡を紹介している。

後輩たちへのメッセージを聞くと「シンククロール、アクトローカルの気持ちで、地球的な視野で考え、社会のために役立つ人であれ」と力を込めた。「しらせを再び走らせ、地球環境の調査に連れ出したい」と夢を語る三枝さんの人生航海はまだ始まったばかりだ。